歴史学の冒険

パリの各所で生じた子どもの強奪・誘拐をめぐって

杉山光信

A・ファルジュ/J・ルヴェル 著
三好信子 訳
パリ1750
子供集団誘拐事件の謎
6・5刊 四六判167頁 1854円
新曜社

巡邏隊長はなぜ少年たちを捕まえたのか

パリの住民をひきいたエチエンヌ・マルセルが王太子の宮殿に乱入した十四世紀の事件以来、アンシアン・レジーム下での民衆による暴動は数多く知られている。ル・ロワ・ラデュリーの『ロマーンの謝肉祭』も、十六世紀末のロマーンの町での謝肉祭のさいにブルジョワの仮装隊と民衆の仮装隊の対抗がついには暴動と虐殺にまで達してしまった事件を扱っていたのではなかったか。

この本で扱われるのもそのようなしばしば繰り返された民衆暴動のひとつ、一七五〇年五月のパリの事件である。ただし、暴動の始まりは身分議会の代表と権力者との対立とか、パンの不足や価格の高騰とかではなく、子どもの強奪・誘拐であるというところが変わっている。

パリのフォーブール・サン＝ロランという一画で、十三歳から十五歳くらいの少年たちが二十人ほど集まって遊んでいた。そこにいきなり巡邏警察の一隊がやってきて、その少年たちのうちの六人を逮捕し、馬車に押し込める。当時のパリには二通りの警察があった。高等法院の管轄下の地区警視たちは行政一般にかかわる役人であり、監視や弾圧は彼らの本職ではなく、地区の住人の日常のいざこざを解決する世話役のようなもの。これにたいし、十八世紀はじめに創設される巡邏警察は担当大臣に直属しており、「弾圧がその優先的な使命」である。突然現れ少年たちを捕まえ連行していくのは後者なのだ。

そのやり方はだれが見てもあまりにひどい。そばにいた近衛兵でさえ逮捕をやめさせようとして小競り合いを生じさせる。小競り合いは衝突にエスカレート、混乱のうちに馬車に押し込められた子どもたちはシャトレ監獄へ連れて行かれてしまう。

おさまらないのは町の住民たちである。以前から、変装した巡邏隊長があちこちに出没して少年たちを捕まえているとのうわさはあった。それで人びとは巡邏警察が通るのをみかけると警戒の言葉をかけあう。するとその言葉が騒乱のきっかけとなり、巡邏警察の馬車はおそわれ、運悪く民衆に捕まった巡邏隊長はリンチにあって殺されてしまう。同じような事件がこの月にパリの町の各所で生じるのだ。

このような暴動の事件をどのように位置づければよいのであろうか。アンシアン・レジーム期の社会・経済的な矛盾が次第に深まっていくなか、階級的な対立は緊張の度を加えつつあるという文脈に位置させれば、この事件は蓄積された緊張の現れということになろう。なにしろ大革命の勃発も間近なのだ。

しかし、裁判記録や同時代人の日記などから、まるで現在生じていて、テレビをみたり週刊誌を読んで私たちがもつような生々しくリアルなイメージを喚起させようとする著者たちの狙いはそこにはない。ル・ロワ・ラデュリーの歴史人類学も最終的には政治史の枠をもってくるのだが、著者たちは「社会的な主演者それ自体には関心をよせず、むしろ集合的な配置や展開を優先する伝統」である社会史のうちのある流れに忠実であろうとするのである。それは「資料を読むなかで、現代のわたしたちには不明瞭に思えるさまざまな行為の意味を把握しようとする」ことでもある。

今日、なにか事件があるとテレビや新聞関係の人びとはすぐに現場にとんでいき、事件のシチュエーションを詳しく報道する。報道するだけではなく解説やニュース・ショーのなかで行為者たちの動機はさまざまに推測され、批評される。行為の意味についての言説の洪水のなかで、どれが本当のものなのか結局は「藪のなか」に放置されるし、全体の流れという文脈もかえりみられない。巡邏隊長が少年たちを捕まえるのは金目当てのことなのか、フーコーのいう秩序化の一環なのか、結局は読み手に委ねられるというわけだが、このような歴史学の冒険が可能となるのも、他方では歴史学研究の長いしっかりした伝統があればこそなのだろう。

（東京大学社会情報研究所）